

研究報告

領域「表現」と小学校「音楽科」の接続に関する一考察 —音楽表現活動における環境構成と保育者の援助を手がかりに—

金山茉莉花（佐久大学信州短期大学部）

A Study on Transition between Area “Expression” and Elementary School “Music Department” —Focusing on the Environmental Composition and Support for Children in Musical Activities—

Marika Kanayama (Shinshu Junior College at Saku University)

要旨: 本研究では、子どもが音楽に親しむための環境構成や保育者の援助の事例を手がかりとして領域「表現」と小学校「音楽科」の学習指導要領の内容の関連性を明らかにし、幼児教育施設における領域「表現」の指導のあり方について検討した。

環境構成は小学校「音楽科」の器楽及び鑑賞の分野との関連が多く、保育者の援助は、歌唱分野において関連が多くみられた。それらの関連性を踏まえた音楽表現の指導においては、幼児期から音楽を身近に感じながら親しみを持つことのできる環境構成や、保育者の援助として自らが楽しそうに歌ったり楽器を演奏したりすること、子どもの模範となるような歌唱や楽器演奏を行うことが重要であると考ええる。

Abstract: This study aimed to clarify the connections between the area “expression” and the content found in the teaching guidelines of the elementary school “music department.” To achieve this objective, it examines the environmental composition that can familiarize children with music and presents actual case studies of support for children applications to review the ideal pedagogy for early childhood education facilities to inculcate area “expression.”

Connections can be made between the concept of environmental composition and numerous items classified in the teaching guidelines of the elementary school “music department” as elements of playing instruments and music appreciation. Links can also be created between the idea of support for children and many items categorized as singing. Such potential associations underscore the importance of ensuring an environmental composition that allows children to feel the presence of music around them when teaching children about musical expression so they can become acquainted with music from a young age. It is also vital that nursery teachers set a positive example for the children. To do so, teachers should enjoy themselves when they sing or play musical instruments while conducting music lessons.

キーワード: 幼小接続、領域「表現」、小学校「音楽科」、環境構成、保育者の援助

Keywords: transition between kindergarten and elementary school education, area “expression”, elementary school “music department”, environmental composition, support for children

I. はじめに

1. 研究の背景

平成 30 年に初めて同時改定された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、三法令）第 1 章総則では、幼児教育において「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに明示された。幼稚園教育要領解

説（以下、教育要領解説）によると、「育みたい資質・能力」とは、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」である。この 3 つの柱は、幼児教育と小学校以上の教育との円滑な接続を図るために重要なものであり、三法令の改訂において幼児期に育むべき力がより明確に示された。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、教育要領解説によれば、「第 2 章に示すねらい及び内容に基づいて、各幼稚園で、幼児期にふさわしい遊びや生

活を積み重ねることにより、幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿である。」と記されている。小学校学習指導要領解説総則編（以下、学習指導要領解説総則編）第1章第2の4(1)においても、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。」と明記されている。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を幼稚園教諭・保育士・保育教諭（以下、保育者）と小学校教諭が共有することは、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園（以下、幼児教育施設）と小学校の双方において子どもの幼児期から児童期への発達の流れの理解とそれを踏まえた指導を促すことにつながる。加えて、学習指導要領解説総則編第1章第2の4(1)には、「小学校の入学当初においては、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、スタートカリキュラムを児童や学校、地域の実情を踏まえて編成し、その中で、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが求められる。」という記述もある。音楽の授業も小学校第一学年から学習する教科であり、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通して育まれたことが、小学校入学後の学習に円滑に接続されるような指導が、幼児教育と小学校教育の双方に求められるのである。

これまで、領域「表現」と小学校「音楽科」の接続に関する研究は複数報告されてきた。山内、持田（2017）は小学校学習指導要領（以下、学習指導要領）「音楽科」が示す4つの音楽活動（①歌唱②器楽③音楽づくり④鑑賞）と幼稚園教育要領（以下、教育要領）が示す領域「表現」における内容（全8項目のうち、音楽的な内容に関する6項目）との関連について調査し、「児童期における四つの音楽活動のうち、表現領域と関連事項が最も多いのは、①歌唱、次いで②器楽、③音楽づくり、最も少ないのは④鑑賞である。」と報告している。一方、教育要領及び学習指導要領の変遷を分析した長谷川（2018）は、「鑑賞をより能動的な音楽活動として捉えるための観点として、表現活動の中で起こる〈鑑賞〉も重要である。」と指摘している。また、坪井（2021）は幼稚園教育要領に記されている領域「表現」の内容を踏まえ、「より自発的な『音楽を体感する』活動を行うこと

の重要性を、音楽科の教科書・教材から検証した。」と報告している。この3つの研究からは、幼児期は生活や遊びにおいて自然に音楽に触れながら自分なりに表現を楽しむこと、小学校では表現（歌唱・器楽・音楽づくり）と鑑賞を相互に関わりのある活動として取り組むことが子どもにとって大切であることが読み取れる。

実践事例を用いた研究としては、松永ら（2019）が幼小連携教育を行っている幼稚園及び小学校の実践を分析した上で、幼小連携に際しての身体表現を取り入れた歌唱指導の有用性について報告している。また、村松（2020）は、リトミック教室の2～5歳児クラスにおける音楽表現活動の実践内容をもとに、「音程を感じながら身体を動かし歌唱する活動や曲想やリズムを感じる音楽表現活動を乳幼児期から継続的に実践することは、小学校教育音楽科で学ぶ思考力・判断力・表現力等や、知識、技能に関する資質・能力の基礎を遊びのなかで養うことができるといえよう。」と述べている。これら2つの研究からは、幼児期に身体表現と歌唱を一体的に体験することが小学校での学びとつながることが分かる。

このように、先行研究では教育要領及び学習指導要領の内容の関連性や、教科書・教材や実践事例に関する研究が中心であった。教育要領と学習指導要領の関連項目は、鑑賞に比べて歌唱・器楽・音楽づくりの方が多いことが示されている。それには、学習指導要領には各学年の目標及び内容において具体的な指導内容が明記されているが、教育要領における領域「表現」には学年ごとの記載はなく、音楽を含む表現全体の内容について述べられているという違いが影響を与えている可能性も考えられる。幼児教育施設における実践においては、保育者は、遊びや生活の場面に応じた曲を流す、保育室に小さなステージを設け子どもが自主的に音楽表現をする場をつくるなど様々な環境構成や援助を行い、子どもの音楽活動を支えていると推察される。しかし、このような音楽表現活動の具体的な指導内容と小学校「音楽科」の指導内容のつながりに関する知見は得られていない。

2. 研究の目的

本研究は、幼児教育施設での音楽表現活動を実践する上で行われている環境構成と保育者の援助の事例を小学校「音楽科」の学習指導要領における内容と照合して分析し、領域「表現」と小学校「音楽科」の指導の関連性を明らかにし、幼児教育施設における円滑な接続につながる指導のあり方を探ることを目的とするものである。

具体的には、子どもが音楽に親しむための環境構成や

保育者の援助の事例を用いて、学習指導要領の内容との関連性を明らかにする。その上で、幼児教育施設における音楽表現の指導のあり方について検討する。

その際、教育要領「第2章 ねらい及び内容」における領域「表現」の記載内容が、三法令に共通するものであることを踏まえ、本研究では教育要領及び教育要領解説を引用文献として使用する。

Ⅱ. 研究方法

1. 事例の抽出

本研究では、金山（2018）の先行研究の一環として実施した保育者への質問紙調査の回答から抽出した事例を使用する。金山（2018）は、子どもが音楽に親しむため

の環境構成と保育者の援助の実態を明らかにすることを目的として、幼児教育施設に勤務する保育者を対象として質問紙調査を実施した。子どもが音楽に親しむために保育者が行っている環境構成と援助について、記述欄を設け回答を得た。得られた回答について、環境構成は「CDで曲を流す」、「歌詞・階名理解のための視覚教材の掲示」、「場の確保」、「楽器の配置」の4事項、保育者の援助は「保育者自身について」、「歌う活動への援助」、「リズムや楽器活動への援助」の3事項に分類した。その結果、環境構成として「遊びや生活の場面に応じた曲を流す」、「歌詞を書いた紙を子どもたちの見えるところに貼る」など、計46件の事例があげられた。また、保育者の援助は「保育者が楽しそうに歌ったり演奏したりする」、「朝の会・帰りの会で季節の歌を歌ったり手遊び

表1. 小学校「音楽科」学習指導要領の内容

領域	分野	内容
A 表現	(1)歌唱	ア 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつこと。
		イ 曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと。
		ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。 (ア) 範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能 (イ) 自分の歌声及び発音に気を付けて歌う技能 (ウ) 互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能
	(2)器楽	ア 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いをもつこと。
		イ 次の(ア)及び(イ)について気付くこと。 (ア) 曲想と音楽の構造との関わり (イ) 楽器の音色と演奏の仕方との関わり
		ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。 (ア) 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能 (イ) 音色に気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能 (ウ) 互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能
	(3)音楽づくり	ア 音楽づくりについての知識や技能を得たり生かしたりしながら、次の(ア)及び(イ)をできるようにすること。 (ア) 音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ること。 (イ) どのように音を音楽にしていくかについて思いをもつこと。
		イ 次の(ア)及び(イ)について、それらが生み出す面白さなどと関わらせて気付くこと。 (ア) 声や身の回りの様々な音の特徴 (イ) 音やフレーズのつなげ方の特徴
		ウ 発想を生かした表現や、思いに合った表現をするために必要な次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。 (ア) 設定した条件に基づいて、即興的に音を選んだりつなげたりして表現する技能 (イ) 音楽の仕組みを用いて、簡単な音楽をつくる技能
B 鑑賞		ア 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏の楽しさを見だし、曲全体を味わって聴くこと。
		イ 曲想と音楽の構造との関わりについて気付くこと。

※図表中の内容におけるアは「思考力、判断力、表現力等」に関する資質・能力、イは「知識」に関する資質・能力、ウは「技能」に関する資質・能力である。

出典：文部科学省（2018）「小学校学習指導要領解説音楽編」P.21に基づき領域・分野を構成し、内容はP.30、36、42、49をもとに筆者が作成した。

などをし、季節感を味わい歌う楽しさを感じられるようにする」など、計 66 件の事例が見られた。これらについて、内容が重複する事例は 1 件にまとめ、環境構成や援助には該当するものの音楽表現活動に直接関係しないものを除外し事例を抽出した結果、環境構成の事例は 11 件、保育者の援助の事例は 13 件であった。抽出した事例は表 2、3 に示した。

2. 分析方法と手順

抽出した環境構成と保育者の援助の事例について、小学校「音楽科」の歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞の各分野に表記された内容ア～ウ（表 1）と関連がある場合は○で示した（表 2、3）。具体的には、事例に示された音楽表現指導が、小学校「音楽科」の学習指導要領の内容の基礎となるかどうかに関連性の判断基準とした。例えば、「ペープサートやイラストで歌詞の意味、内容をわかりやすく伝える。」という環境構成は、子どもが歌詞の内容を理解し曲が伝えようとしている心情や情景を想像しながら歌うために行われる指導内容である。それは、小学校「音楽科」において「ア 歌唱表現についての知

識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつこと。」「イ 曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと。」の基礎となると判断した。

分析に際しては、幼児教育を専門とする研究協力者にも分析を依頼し、個々に分析を行った結果を照合すると同時に、齟齬がある項目については両方で協議した。

3. 研究倫理について

本研究における環境構成と保育者の援助の事例は、既に公表されている金山（2018）の論文の分析結果を使用する。

Ⅲ. 結果

1. 環境構成と小学校「音楽科」の内容との関連

保育者が行っている環境構成と小学校「音楽科」学習指導要領の内容との関連性を表 2 に示した。

表 2 からは、次のような環境構成の事例と小学校「音

表 2. 環境構成の事例と小学校「音楽科」の内容との関連

環境構成の事例	A 表現																B 鑑賞		
	(1)歌唱					(2)器楽					(3)音楽づくり								
	ア	イ	ウ			ア	イ		ウ			ア		イ		ウ		ア	イ
			(ア)	(イ)	(ウ)		(ア)	(イ)	(ア)	(イ)	(ウ)	(ア)	(イ)	(ア)	(イ)	(ア)	(イ)		
ペープサートやイラストで歌詞の意味、内容をわかりやすく伝える。	○	○																	
歌詞を書いた紙を子どもたちの見えるところに貼る。	○	○																	
鍵盤ハーモニカ練習の際、階名を書いた紙を貼りいつでも見られるようにする。								○	○	○									
朝の歌の時間にマラカスや鈴を用意する。									○	○	○								
日常の中でも曲を聴かせ、そこから合奏やリズム遊びに使用していく。						○	○	○	○	○	○	○						○	
みんなで作った楽器を置いておく。												○	○						
遊びや生活の場面（午睡も含む）に応じた曲を流す。			○						○		○							○	
遊びの場面で子どもたちの要望に合わせ音楽を流す。			○						○		○							○	
ピアノやフルートなど本物の演奏を聴く場をつくる。			○		○				○		○							○	○
保育室内にステージ（小さいもの）を設け、発表を楽しめるようにする。																		○	○
音楽発表会など演奏を聴いてもらう場を設ける。																		○	○

※各分野（歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞）の内容ア～ウと関連がある内容を○で示した。

楽科」の内容との関連性が見られた。

1) 歌唱分野と環境構成の関連性

歌唱分野と関連がある事例は5件であった。「ペーパースートやイラストで歌詞の意味、内容をわかりやすく伝える。」「歌詞を書いた紙を子どもたちの見えるところに貼る。」の2件は、いずれも「ア 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつこと。」「イ 曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと。」と関連があった。

また、「遊びや生活の場面（午睡も含む）に応じた曲を流す。」「遊びの場面で子どもたちの要望に合わせ音楽を流す。」「ピアノやフルートなど本物の演奏を聴く場をつくる。」の3件は「ウ(ア) 範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能」と関連があることが示された。「ピアノやフルートなど本物の演奏を聴く場をつくる。」は「ウ(ウ) 互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能」とも関連があった。

2) 器楽分野と環境構成の関連性

器楽分野と関連がある事例は6件であった。まず、「日常の中でも曲を聴かせ、そこから合奏やリズム遊びに使用していく。」は器楽分野の項目すべてと関連があった。次に、「朝の歌の時間にマラカスや鈴を用意する。」「遊びや生活の場面（午睡も含む）に応じた曲を流す。」「遊びの場面で子どもたちの要望に合わせ音楽を流す。」「及び「ピアノやフルートなど本物の演奏を聴く場をつくる。」の4件はいずれも「ウ(ア) 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能」、「ウ(ウ) 互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能」と関連があった。「朝の歌の時間にマラカスや鈴を用意する。」は「ウ(イ) 音色に気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能」とも関連があることが示された。さらに、「鍵盤ハーモニカ練習の際、階名を書いた紙を貼りいつでも見られるようにする。」は、「イ(イ) 楽器の音色と演奏の仕方との関わり」、「ウ(ア) 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能」、「ウ(イ) 音色に気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能」との関連が示された。

3) 音楽づくり分野と環境構成の関連性

音楽づくり分野と関連がある事例は2件であった。「みんなで作った楽器を置いていく。」は、音楽づくり分野「ア(ア) 音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ること。」「ア(イ) どのように音を音楽にしていかに

ついて思いをもつこと。」と関連があった。また、「日常の中でも曲を聴かせ、そこから合奏やリズム遊びに使用していく。」は「ア(ア) 音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ること。」と関連がみられた。

4) 鑑賞分野と環境構成の関連性

鑑賞分野と関連がある事例は6件であった。「ア 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏の楽しさを見だし、曲全体を味わって聴くこと。」「イ 曲想と音楽の構造との関わりについて気付くこと。」のいずれの内容にも関連する事例は、「ピアノやフルートなど本物の演奏を聴く場をつくる。」「保育室内にステージ（小さいもの）を設け、発表を楽しめるようにする。」「そして「音楽発表会など演奏を聴いてもらう場を設ける。」の3件であった。また、「日常の中でも曲を聴かせ、そこから合奏やリズム遊びに使用していく。」「遊びや生活の場面（午睡も含む）に応じた曲を流す。」「及び「遊びの場面で子どもたちの要望に合わせ音楽を流す。」の3件は、「ア 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏の楽しさを見だし、曲全体を味わって聴くこと。」と関連がみられた。

2. 保育者の援助と小学校「音楽科」の内容との関連

幼児教育施設において、子どもが音楽に親しむための保育者の援助と学習指導要領の内容との関連性を表3に示す。なお、「保育者が楽しそうに歌ったり演奏したりする。」「及び「子どもが喜びそうな教材を選び、保育者が楽しそうに歌ったり楽器を演奏したりして指導する。」の2件は、歌唱・器楽の両方の内容に関連する項目として扱う。

表3からは、次のような保育者の援助の事例と小学校「音楽科」の内容との関連性が見られた。

1) 歌唱分野と保育者の援助の関連性

歌唱分野と関連がある事例は10件であった。まず、「子どもの中で流行している歌を取り入れる。」「朝の会・帰りの会で季節の歌を歌ったり手遊びなどをし、季節感を味わい歌う楽しさを感じられるようにする。」「歌を歌う時は振付や歌詞ばさみをして親しみやすくする。」「手拍子でリズム遊びをしたり、音楽に合わせて身体表現をしたりする。」の4件は、「ア 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつこと。」「イ 曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと。」と関連がみられた。「朝の会・帰りの会で季節

表 3. 保育者の援助の事例と小学校「音楽科」の内容との関連

保育者の援助の事例	A 表現																	B 鑑賞		
	(1)歌唱					(2)器楽					(3)音楽づくり									
	ア	イ	ウ			ア	イ			ウ		ア		イ		ウ			ア	イ
			(ア)	(イ)	(ウ)		(ア)	(イ)	(ウ)	(ア)	(イ)	(ア)	(イ)	(ア)	(イ)					
子どもの中で流行している歌を取り入れる。	○	○																○	○	
朝の会・帰りの会で季節の歌を歌ったり手遊びなどをし、季節感を味わい歌う楽しさを感じられるようにする。	○	○	○																	
歌を歌う時は振付や歌詞ばさみをして親しみやすくする。	○	○	○																	
ふれあい遊びの中でよく歌っている歌を保育者自身が口ずさむ。			○		○															
ピアノをいつでも弾ける状態にし、子どもたちが口ずさんだら皆で歌えるよう弾く。					○															
遊びの中でもピアノを弾き子どもが音楽に親しめるようにする。					○													○		
保育者が楽しそうに歌ったり演奏したりする。			○		○				○		○									
子どもが喜びそうな教材を選び、保育者が楽しそうに歌ったり楽器を演奏したりして指導する。			○		○				○		○									
リズム打ちなどを保育に取り入れ楽しみながら楽器に親しみを持てるようにする。									○	○	○									
手拍子でリズム遊びをしたり、音楽に合わせて身体表現をしたりする。	○	○				○	○					○						○	○	
自分達で楽器作りをする。												○		○						
音の高さや速さを変えながら楽しむ。												○	○	○	○			○	○	
身体表現・手遊び、体操、リトミックを通して音楽に親しみを持てるようにする。	○					○								○	○			○	○	

※各分野（歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞）の内容ア～ウと関連がある内容を○で示した。

の歌を歌ったり手遊びなどをし、季節感を味わい歌う楽しさを感じられるようにする。」「歌を歌う時は振付や歌詞ばさみをして親しみやすくする。」の2件は「ウ(ア) 範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能」とも関連があった。

次に、「身体表現・手遊び、体操、リトミックを通して音楽に親しみを持てるようにする。」は「ア 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつこと。」と関連があることが示された。

さらに、「ふれあい遊びの中でよく歌っている歌を保育者自身が口ずさむ。」「保育者が楽しそうに歌ったり演奏したりする。」「子どもが喜びそうな教材を選び、保育者が楽しそうに歌ったり楽器を演奏したりして指導する。」は、同分野「ウ(ア) 範唱を聴いて歌ったり、

階名で模唱したり暗唱したりする技能」、「ウ(ウ) 互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能」と関連があった。また、「ピアノをいつでも弾ける状態にし、子どもたちが口ずさんだら皆で歌えるよう弾く。」「遊びの中でもピアノを弾き子どもが音楽に親しめるようにする。」の2件は「ウ(ウ) 互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能」との関連が見られた。

2) 器楽分野と保育者の援助の関連性

器楽分野と関連がある事例は5件であった。「保育者が楽しそうに歌ったり演奏したりする。」「子どもが喜びそうな教材を選び、保育者が楽しそうに歌ったり楽器を演奏したりして指導する。」「リズム打ちなどを保育に取り入れ楽しみながら楽器に親しみを持てるようにする。」の3件は、器楽分野「ウ(ア) 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能」、「ウ(ウ) 互

いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能」と関連が示された。「リズム打ちなどを保育に取り入れ楽しみながら楽器に親しみを持てるようにする。」は、「ウ(イ) 音色に気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能」とも関連があった。

また、「手拍子でリズム遊びをしたり、音楽に合わせて身体表現をしたりする。」は、「ア 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いをもつこと。」「イ(ア) 曲想と音楽の構造との関わり」と関連が見られた。

さらに、「身体表現・手遊び、体操、リトミックを通して音楽に親しみを持てるようにする。」は、「ア 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いをもつこと。」と関連があった。

3) 音楽づくり分野と保育者の援助の関連性

音楽づくり分野との関連がある事例は4件であった。「音の高さや速さを変えながら楽しむ。」は音楽づくり分野「ア(ア) 音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ること。」「ア(イ) どのように音を音楽にしていくなかについて思いをもつこと。」及び「イ(ア) 声や身の回りの様々な音の特徴」。「イ(イ) 音やフレーズのつなげ方の特徴」と関連がみられた。「手拍子でリズム遊びをしたり、音楽に合わせて身体表現をしたりする。」「自分達で楽器作りをする。」は「ア(ア) 音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ること。」と関連が見られ、このうち「自分達で楽器作りをする。」は「イ(ア) 声や身の回りの様々な音の特徴」とも関連があった。また、「身体表現・手遊び、体操、リトミックを通して音楽に親しみを持てるようにする。」は「イ(ア) 声や身の回りの様々な音の特徴」。「イ(イ) 音やフレーズのつなげ方の特徴」と関連が見られた。

4) 鑑賞分野と保育者の援助の関連性

鑑賞分野との関連がある事例は5件であった。「子どもの中で流行している歌を取り入れる。」「手拍子でリズム遊びをしたり、音楽に合わせて身体表現をしたりする。」「音の高さや速さを変えながら楽しむ。」「身体表現・手遊び、体操、リトミックを通して音楽に親しみを持てるようにする。」の4件は鑑賞分野「ア 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏の楽しさを見だし、曲全体を味わって聴くこと。」「イ 曲想と音楽の構造との関わりについて気付くこと。」のいずれの事項とも関連があった。また、「遊びの中でも

ピアノを弾き子どもが音楽に親しめるようにする。」は「ア 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏の楽しさを見だし、曲全体を味わって聴くこと。」と関連が見られた。

IV. 考察

1. 環境構成と小学校「音楽科」の内容との関連

1) 歌唱分野と環境構成の関連性

ペーパサートや歌詞を書いた紙などを活用することは、子どもが歌詞に込められた情景をイメージしながら歌うための環境構成であると考えられる。小学校における歌唱指導では、「歌わせる前にイメージや思い、意図を目に見える形によって、視覚化させておくことは有効であると言える。」(田端、2016)と報告されている。このような歌詞の意図を可視化する環境構成は、「曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて、児童が自ら気付く」(学習指導要領解説音楽編)ことにもなる。音楽表現のための環境構成と小学校における歌唱指導の関連を示すものであるといえよう。

2) 器楽分野と環境構成の関連性

音楽を流すことは、「教師と一緒に美しい音楽を聴いたり、友達と共に歌ったり、簡単な楽器を演奏したりする」(教育要領解説)ための環境構成であり、日常生活で音楽に親しむ体験を支えるものである。望月、山本(2021)は「幼児期に存分に音遊びや楽器遊びを行うことが、小学校入学後の器楽や鑑賞、音楽づくりでの学びを支え、豊かな学びを引き出す土壌となると考える。」と指摘しており、小学校での学びの基礎にもつながると考える。

また、階名を書いた紙の掲示は、子どもが鍵盤ハーモニカを演奏するための環境構成であると推察される。小学校では、「第1学年及び第2学年で取り上げる旋律楽器は、オルガン、鍵盤ハーモニカなどの中から児童や学校の実態を考慮して選択すること。」(学習指導要領解説音楽編)とある。鍵盤ハーモニカは、幼児期から小学校接続期に使用されていることが明らかである。そして、鈴やマラカスなど小物打楽器を用意する環境構成は、「音楽に関わる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていく」(教育要領解説)と考えられる。檜下ら(2020)は、小学校では「音のなるモノによる音遊びの経験を重ねるべきである。」と述べており、幼児期から小物打楽器が身近にある環境構成の大切さが示されたといえよう。

3) 音楽づくり分野と環境構成の関連性

完成した手作り楽器を置いておくことは、子どもが手作り楽器の製作を楽しむだけでなく、生活場面の中で使用する機会も確保する環境構成である。これは、小学校における音遊びの「声や身の回りの様々な音に親しみ、その場で様々な音を選んだりつなげたりして表現すること」(学習指導要領解説音楽編)につながるものである。

4) 鑑賞分野と環境構成の関連性

音楽を流すことをはじめ、子ども同士で互いに演奏や歌を聴き合ったり、生演奏を聴いたりする機会を設けることは、「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」(教育要領解説) ための環境構成である。小学校では、「鑑賞学習は単独ではなく、歌唱や音楽づくりなどと関連させて随時取り入れられている。」(安藤、2019) ことから、幼児期から様々な形で音楽に触れることのできる環境構成が大切だと考える。

2. 保育者の援助と小学校「音楽科」の内容との関連

1) 歌唱分野と保育者の援助の関連性

子どもがなじみやすい曲を保育者が口ずさむことは、子どもがより楽しく音楽に関わるための保育者の援助である。安藤(2019)は、小学校での歌唱指導について「低学年の児童に好ましい活動として、まずは友達と一緒に知っている歌を楽しく歌う喜びを味わうために幼児期の童謡や生活の中で馴染みのある曲を扱っている。」と報告している。また、学習指導要領解説音楽編には、「曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつためには、その過程で新たな知識や技能を習得することと、これまでに習得した知識や技能を活用することの両方が必要となるからである。」とある。幼児期になじんだ曲が小学校「音楽科」の教材として使用されることから、子どもが楽しく音楽に関わるための保育者の援助が重要であることがわかる。また、子どものなじみやすい曲を歌う中で身に付けた知識や技能は、小学校での歌唱に活かすことができるといえる。

次に、振付や歌詞ばさみを用いることは、子どもが初めて聴く曲に親しみをもつほか、曲想をイメージしながら表現するための保育者の援助である。この援助は、小学校「音楽科」において「曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて、児童が自ら気付く」(学習指導要領解説音楽編) ことにつながるという。

また、保育者が楽しそうに歌うことは、子どもに音楽

表現の楽しさを伝えるために大切な援助である。小学校音楽科では、「範唱は、教師や児童による演奏をはじめ、音源や映像等の視聴覚教材の利用、専門家による演奏などが考えられる。」「模唱とは、教師や友達が歌うのを聴いてまねて歌うこと」(学習指導要領解説音楽編)とも示されている。また、田代(2017)は、範唱について「幼児から小学校低学年までの年齢が低い学習者や音楽経験が浅い学習者など、楽譜を読むことに習熟していない、読譜能力の低い学習者が主たる対象である。」と指摘している。範唱は楽譜が読めない子どものための歌唱指導であり、接続期に適した指導方法でもあるといえよう。

さらに、子どもの動きに合わせたピアノ伴奏を弾くという保育者の援助は、子どもにとって小学校で「互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能」を身につけることにつながると考える。

2) 器楽分野と保育者の援助の関連性

保育者が楽器演奏を楽しんだり、リズム打ちを取り入れたりすることは、子どもに音楽表現の楽しさを伝えるための保育者の援助であると考えられる。「小学校1年生で声や楽器の音色などを聴き取り、簡単なリズムで音楽表現や身体表現をする活動は、幼稚園等においても実践することが可能で幼小連携につながる重要な視点であろう。」(萬、2020)と報告されている。また、楽譜が読めない子どもたちに対する範奏の役割を担っているとも考えられる。

3) 音楽づくり分野と保育者の援助の関連性

リズム遊びや身体表現などを取り入れることは、音楽を形づくっている要素について遊びを通して理解するための保育者の援助である。安藤(2019)は、小学校「音楽科」において「歌う活動と合わせて拍に関連したリズム表現活動も多く行われている。」と指摘している。「音遊びとは、友達と関わりながら、声や身の回りの様々な音に親しみ、その場で様々な音を選んだりつなげたりして表現すること」(学習指導要領解説音楽編)であり、幼児期にリズム遊びや身体表現などを存分に体験することが、小学校「音楽科」での音楽づくりの土台を培うことになるという。

また、手作り楽器の製作を取り入れることは、子どもが身の回りの様々な音に出会うための保育者の援助である。古庵(2017)は、小学校「音楽科」における手作り楽器の製作や演奏について、「低学年ではひとつの楽器にひとつの音であることが多く、単体で出る音質を使った『音楽づくり』ができ、音楽とは決して既製楽器だけ

で構成できるものとは限らないこと、新たな音楽の楽しみや価値を知ることができる。」と指摘しており、幼児期において音楽づくりの基礎を培うことになるといえよう。

4) 鑑賞分野と保育者の援助の関連性

鑑賞分野と関連性がみられた保育者の援助 5 件は、鑑賞するための直接的な援助ではなく、歌唱や身体表現・手遊び、体操、リトミックなどの音楽表現活動に対する援助である。このような音楽表現活動は、子どもにとって表現する機会であると同時に、友達や保育者の表現を鑑賞する機会でもあることから、関連がみられたと考える。

V. 結語

1. 領域「表現」と小学校「音楽科」の連続性

領域「表現」における環境構成や保育者の援助と小学校「音楽科」の指導内容には、様々な関連性があることが明らかとなった。日常生活の場面に応じた音楽を流すこと、音楽に親しむ機会や場を設定することなどの環境構成は、器楽及び鑑賞の分野との関連が多くみられた。選曲や指導方法、保育者自身が楽しむ姿勢を示すなどの保育者の援助は、歌唱分野において関連が多くみられた。幼児教育が、環境を通して行う教育の特質をもつものであり、子どもが自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしいかわり方を身に付けていくことを意図した教育が行われていることを示すものでもある。

2. 連続性を踏まえた領域「表現」の指導のあり方

本研究で明らかになった、連続性を踏まえた幼児教育における領域「表現」の指導のあり方を以下に示す。

まず、子どもが音楽をより身近に感じることでできる環境構成として、生活の場面で音楽に触れる機会を確保することが大切である。子ども同士でお互いに演奏を聴き合ったり、楽器の生演奏を鑑賞する機会を与えることも、子どもの豊かな感性を育むことにつながるといえる。今回の学習指導要領の改定に伴い、小学校「音楽科」では生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を身につけることが今後重視されることから、幼児期から音楽を身近に感じながら親しみを持つことのできる環境構成が必要である。

保育者の援助の中では、保育者が楽しそうに歌ったり楽器を演奏したりすることが大切である。学習指導要領

には、範唱を聞いて歌ったり、範奏を聴いて楽器を演奏することが内容として挙げられていることから、保育者は、子どもの模範となるような歌唱や楽器演奏をすることも必要である。また、小学校では教師の伴奏に合わせて、子ども同士でお互いに声を合わせて歌うことが求められる点を考慮すると、保育者によるピアノ伴奏の役割は大きい。さらに、リズム手遊びや身体表現を幼児期から体験することは、子どもが音楽を形づくっている要素を体全体で感じ取る上で大切にすべきである。

VI. 本研究の限界

本研究は、金山（2018）の研究における保育者への質問紙調査の回答から抽出した事例と学習指導要領の内容を照合し分析したものであり、今後は、現場の保育者や小学校教員からの意見をもとに領域「表現」と小学校「音楽科」の接続について分析する必要がある。具体的には、現地調査やインタビュー調査を通して、保育者及び小学校教諭の意見を聴取し、幼児教育における音楽表現と小学校教育における音楽の授業との円滑な接続について検討することである。そして、三法令の改訂が反映された現在の幼児教育において行われている環境構成や保育者の援助を手がかりに、領域「表現」と小学校「音楽科」の接続について明らかにしていくこととする。

VII. 利益相反

本研究に関連し、開示すべき利益相反状態は無い。

引用文献

- 1) 安藤江里（2019）. 小学校低学年の音楽的発達を促す指導法の考察：楽器遊びと身体動作に着目して. 松本大学研究紀要, 17, 56, 57.
- 2) 長谷川恭子（2018）. 保育および初等教育における幼小接続を目指した〈鑑賞〉についての一考察—保育における〈鑑賞〉の在り方を視点として—. 秋草学園短期大学紀要, 35, 79.
- 3) 金山茉莉花（2018）. 子どもが音楽に親しむための環境構成と保育者の援助に関する一考察. 保育文化研究, 7, 21-22.
- 4) 檜下達也, 平井恭子, 樫山ゆかり, 高野史朗, 中東静香, 古賀松香（2020）. 子どもと楽器の出会いのプロセス：幼稚園の音楽活動と小学校器楽教育の接

- 続に着目して. 京都教育大学紀要, 137, 188.
- 5) 古庵晶子 (2017). 小学校新学習指導要領にみる音楽科における「音楽づくり」の方向性—学生の手作り楽器による「音楽づくり」活動を通して—. こども教育研究, 3, 30.
 - 6) 松永洋介, 三輪雅美, 安江真由美 (2019). 幼小連携教育において求められる学力についての一考察—音楽科の指導内容に着目して—. 岐阜大学教育学部研究報告, 67 (2), 81-90.
 - 7) 望月たけ美, 山本華子 (2021). 教育楽器を用いた「合奏劇」の教材性に関する研究: 幼小連携の観点から. 常葉大学教育学部紀要, 41, 253.
 - 8) 文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領解説音楽編. 株式会社東洋館出版社. 9, 14, 30-34, 36, 39-46, 49-50, 74, 131.
 - 9) 文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領解説総則編. 株式会社東洋館出版社. 73-74.
 - 10) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説. フレーベル館. 50, 52, 235, 240.
 - 11) 村松麻衣 (2020). 子どもの主体性を育む音楽表現活動の取り組みに関する一考察—幼小接続を見据えた実践内容に着目して—. 名古屋女子大学紀要, 66, 283.
 - 12) 田端浩多 (2016). 思いや意図をもたせる歌唱指導についての研究—小学校1年生を事例として—. 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」, 8, 109.
 - 13) 田代和久 (2017). 歌唱指導における効果的な範唱. 常葉大学教育学部紀要, 37, 268.
 - 14) 坪井眞里子 (2021). 小学校第1学年音楽科教材から読み解く、幼小接続の一考察. 名古屋女子大学紀要, 67, 107.
 - 15) 山内信子, 持田葉子 (2017). 幼小接続期における音楽表現活動の検討. 聖和短期大学紀要, 2, 66-68.
 - 16) 萬司 (2020). 子どもの音楽表現から考える幼小連携: 子ども向けミュージカルの実践から. 拓殖大学論集, 人文・自然・人間科学研究, 44, 137.